

# 漢 字 2

加納 千恵子

## Kanji 2

KANO Chieko

### 1. クラスの概要

日本語補講「漢字2」は、週1コマ(10週)の75分授業で、登録者数は毎学期20人前後、非漢字圏学習者、漢字圏学習者(中国、台湾など)および韓国の学習者が混在している。テキストは、『Basic Kanji Book』Vol. 2を使用しており、全10回の授業で23の課(L23~L45)をカバーするという超スピードのクラスである。学期中に4回の小テスト(L23~L25、L26~L30、L31~L35、L36~L40)と5回の宿題(L23~L25、L26~L30、L31~L35、L36~L40、L41~L45)を課している。最後に期末テスト(L23~L45)を行うが、成績は期末テストの結果を40%、小テストの平均を30%、宿題の平均を30%として計算してつける。

### 2. クラスの目標

「漢字2」クラスでは、初級の漢字を250~300字ぐらい知っている学生に、基本漢字500字を使った漢字語彙の総合的な運用力をつけることを目標としている。特に非漢字圏学習者、漢字圏学習者などが混在していることから、個々の学習者に自分の弱点を自覚させ、それらを克服させるための学習法、例えば漢字の構成要素に気づかせる、音読みと訓読みを区別させる、対になる言葉を意識させる、品詞や動詞の自他、共起する語など漢字語彙の用法に関する情報を与える、などの方法を紹介し、自分にとって有効な学習方法を身につけさせることを目指している。

### 3. 授業の進め方および特徴

受講生には、初回にスケジュール表を渡して簡単なクラス・オリエンテーションを行う。最終回は期末テストになるため、全9回の授業で23の課(L23~L45)をカバーするという超スピードのクラスであり、原則として受講生の予習を期待する授業の進め方であることを告げる。受講生には学期開始後の1~2週間うちにWEBによる「漢字処理能力測定テスト」<sup>(1)</sup>を受けることを依頼しており、各自空き時間を申告して、都合のよい時間に受験させる。テ

スト結果、およびできなかった問題とその正答が即時に各受験者にフィードバックされるため、学習者は自分の弱点を知ることができる仕組みになっている。

教師は毎学期、受講生のテスト結果を参考にしながら、授業で焦点を当てるべき学習項目を決めるが、現在のところ、以下の5項目を中心としている。

- 1) 漢字の訓読みと音読みの区別
- 2) 漢字の構成要素、特に音符と音読みの関係
- 3) 意味的に対をなす漢字および漢字語
- 4) 漢字語の用法 (品詞や動詞の自他など)
- 5) 漢字語の文中での用法 (他の語との共起関係など)

授業の進め方としては、まずテキストの各課の漢字の「書き方」を教師が板書して示し、主に構成要素や似ている字形の漢字との違いなどに注目させる。学生にはワークシート<sup>(2)</sup>を配布し、各字1回ずつ書き込ませて、字形を確認する。次に、テキストの「読み練習」を学生に読ませた後、教師が正しい読みを繰り返しながら、学生にワークシートに読みをひらがなで書かせる。これは、漢字圏学習者などの中に、口頭ではそれらしい発音をしていても、かなで書かせると、長音・短音の区別や清音・濁音の区別などを間違える学生が多くいるためである。最後に、パワーポイントで上記の1) から5) の項目に注目させるためのスライドを見せながら、各課の漢字語彙および短文の速読練習をする。

クラスの特徴としては、非漢字圏学習者にも漢字圏学習者にも役に立つ漢字学習法を紹介しながら、語句および短文の速読練習のために、パワーポイントを使うことである。中心となっている1) から5) の学習項目がどのように提示されているか、以下にその例を示す。

### 3-1. 訓読みと音読みの区別

パワーポイントで学習漢字を使った熟語を提示する際、漢字1字が単独で名詞として使われる場合、また送りがなを伴って和語の動詞や形容詞として使われる場合には、原則として訓読みになること、2字熟語を作る場合には原則として音読みになることを説明し、例1のように、パワーポイントでは、訓読みする漢字とその読みは赤(本稿では点線の下線で示す)、音読みする漢字とその読みは紺色(実線の下線で示す)で見せた。練習のやり方は、まず漢字語を見せ、学生に声に出して読み上げさせた後、教師が範読しながら正しい読みをひらがなで見せて、確認させる。

例1：漢字「色」(L23)

- ・ 色
- ・ いろ
- ・ 特色      原色
- ・ とくしょく   げんしょく

色によって読み分けを示すことにより、訓読みの語、湯桶読みみの語、重箱読みみの語、音読みみの語などを例2のように視覚的に示すことができる。

例2：漢字「赤・黒」(L23)

- ・ 赤い            黒い
- ・ あか            くら
- ・ 赤字            黒字
- ・ あかじ          くらじ
- ・ 赤道            黒板
- ・ せきどう      こくばん

例3、例4のように、音読み、訓読みがそれぞれ複数ある場合、造語力の小さい方の音読みは水色（本稿では二重線）、訓読みはピンク（四角で囲む）で示した。

例3：漢字「画」(L23)

- ・ 映画          画面          画家
- ・ えいが      がめん      がか
- ・ 画数          計画
- ・ かくすう    けいかく

例4：漢字「苦」(L23)

- ・ 苦しい        固い
- ・ くる          にが
- ・ 苦難          苦痛          苦勞
- ・ くなん      くつう      くろう

### 3-2. 漢字の構成要素

学習漢字によく使われる構成要素（部首や音符）が含まれている場合、それらを指摘し、他の漢字例も示す。部首に比べると、形声文字の音符については、学生の知識が非常に少ないことから、例5のように形声文字の音符をグリーン（本稿では【    】）でまとめて示し、学生の注意をひくようにしている。

例5：漢字「記」(L27)

- ・ 記す
- ・ しる

- ・ 記事            記者            記入する
- ・ きじ            きしや          きにゆう
- ・ 【 己 記 紀 起 】
- ・     キ   キ   キ   キ

### 3-3. 意味的に対になる語

学生の漢字の知識を拡充し、漢字語彙のネットワークを作らせることによって記憶に残りやすくするために、例6のように、反義字および反義語を矢印で対照的に示している。片方の語だけを見せて、学生に反義語を考えさせてから、後で矢印の右側を見せるという練習もできる。

#### 例6：漢字「始・終」(L24)

- ・ 始まる      ←→      終わる
- ・ はじ            おわ
- ・ 始点          ←→      終点
- ・ してん          しゅうてん
- ・ 開始する   ←→      終了する
- ・ かいし          しゅうりょう

### 3-4. 漢字語の品詞および用法

漢字2字からなる熟語は、名詞として使われる場合、「する」をつけて動詞となる場合、ナ形容詞となる場合などに分けて並べ、例7のように品詞および用法の違いに注目させる。

#### 例7：漢字「活」(L25)

- ・ 活字            生活
- ・ かつじ          せいかつ
- ・ 活動する      活発な
- ・ かつどう      かつぱつ

訓読みする和語の動詞で、自動詞と他動詞の対がある場合、例8のように、フレーズで並べて示し、助詞の違いに注目させる。

#### 例8：漢字「始・終」(L24)

- ・ 映画が始まる      映画を始める
- はじ                    はじ
- ・ 仕事が終わる      仕事を終える
- お                        お

また、動詞の連用形が名詞として使われる場合は、以下の例9のように示す。

例9：漢字「遊・使」(L24)

- ・子どもが遊ぶ 手を使う  
あそ つか
- ・子どもの遊び 手の使い方  
あそ つか かな

### 3-5. 漢字語の文中での用法

各課の漢字語の読み練習が終わった後で、パワーポイントで短文の読み練習を行う。この時は、文はすべて黒色で示し、学生たちにそれぞれの語を訓読みするのか、音読みするのか自分で判断させるようにする。また、文中でどのような語と共起するのかに注意させ、読みを類推させるようにする。例10のように、一つの文中に訓読み語（点線）と音読み語（実線）を両方入れたり、対になる語（波線）を両方入れたりすることにより、学習した語彙ネットワークの定着、強化を図る。

例10：読んでみよう！（L23～L25）

- ・兄は、私が国を離れている間に、離婚した。
- ・今の日本の生活では、租式より洋式の方が多い。
- ・送別会の後で、友だちを駅まで見送った。
- ・借りたお金を返すために、また借金をする。
- ・寢室で寝たが、すぐに起きてしまった。
- ・座席がいっぱいで座れなかったので、立って映画を見た。

## 4. 今後の課題

クラスの始めに行っている漢字処理能力測定テストでは、漢字圏、非漢字圏を問わず、このレベルの学習者の多くは漢字の音読みが弱く、また文中での漢字語の用法もかなり弱いことがわかっている。例えば、漢字の訓読み語は知っていても、音読み語はまだ知らなかったり、音読みの語を知っていても、漢字1字の音読みを意識していなかったり、というようなことがかなり見られる。学習者がさらに中上級のレベルに進み、読解や作文において膨大な漢字語彙に対処していくためには、漢字の音読みの知識を増やし、それらを効率的に利用してさらに語彙の拡充、的確な用法の習得を図ることが不可欠であろう。

また、学習漢字の語彙の導入法については、一律に同じ順序で導入するのではなく、漢字の性質によって方法を変えたほうがいいのではないかと考えている。例えば、訓読み語の方が易しく既習である漢字の場合は、「赤い→→赤道、黒い→→黒板、返す→→返事」のような

順序で語彙を導入するが、逆に音読み語の方が既習で易しい漢字の場合は、「結婚する→→結ぶ、離婚する→→離れる、映画→→映る」のように音から訓の順序で導入するほうがいいのではないだろうか。さらに、音読みしかない漢字、複数の音読みを持つ漢字などは、また別の導入法をとるなどの工夫も考えられる。

今後、パワーポイントによる練習形式、提示方法ばかりでなく、宿題の形式やフィードバックの方法などについても工夫を重ね、さらに効果的な漢字および漢字語彙の拡充の方法を考えていく必要がある。また、毎学期学生からの授業評価で指摘されることであるが、10週間で23課をこなすという現在の進捗にはやはり無理がある。できれば漢字のクラスをさらに分けて、ゆっくり学習するクラスとスピード学習するクラスなど、学習者が選べるようにできることが望ましい。

## 注

- (1) 制限時間60分以内で、WEB上で受験可能な漢字語彙処理能力の診断テストである。漢字に関する様々な処理能力、字形処理、意味処理、読み処理、書き処理、音声処理、用法処理、文脈処理などの力を測り、学習者の困難点を診断、その後の効果的な学習のための的確なアドバイスを与えることを目的としている。詳細は、加納・酒井(2003)を参照。
- (2) このクラス用に作成した練習プリントで、その課の学習漢字を書くマスと読み練習Ⅰの答を書く欄、およびその答を見ながら(テキストを見ないで)漢字を書く欄が作っている。特に非漢字圏の学習者で漢字の書き方、字形に自信がないものには、クラス後ワークシートを提出すれば、チェックして返す旨を伝えている。漢字圏の学習者の中には、クラスで読み練習の正答を口頭で伝えているが、聞き取りに自信がないためひらがなで書いた読みが正確かどうかチェックしてほしいと言って提出してくる者もいる。

## 参考文献

- 加納千恵子・酒井たか子(2003)「漢字処理能力測定テストの開発」『筑波大学留学生センター日本語教育論』18号, 59-80